
こちら亜露覇（アロハ）高校！

えいすっ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アロハ
こちら亜露霸高校！

【Nコード】

N7704E

【作者名】

えいすっ

【あらすじ】

兄と二人暮らしの呂竜馬。名門呂一族の三男呂猛。いつも浮いているカズ。そんな三人の、すごい高校の凄い出来事が今日もまた始まる！

0話：始まりは受験

時は東暦2007年3月―。

ついにこの日、多くの受験生がこれの為に闘ってきた、受験の日がやってきた。

ここはあろは亜露霸高校。つま、簡単に説明すれば競争率3・0倍の超難関校である。

たくさんのお受験生がいる中、1人の男がいた…。

その男の名は「呂りょ 竜馬りゅうま」母は幼い時に死に、父も2年前に亡くなり、今は兄と2人で生活し、悲しい人生を送っている…はずである。

竜馬は筆箱の中の家族写真を取り出し呼びかけるように言った。

「父上、母上、兄上、僕は今日までたくさんのお努力をしてきました。今日、その身につけた力を存分に發揮して、かならず受かってみせる！」

とまあ、最終的には自分に対する気合注入の独り言みたいなことになったが、本人は気にしなかった。

テスト開始数分前、廊下にドタバタと走る音がして、それは徐々に近づいてきた。そして、竜馬のいる教室へ勢いよく男が1人入ってきた。髪型は短髪気味のオールバック、そこそこの筋肉質な男だった。

「おっと！あぶねえあぶねえ。ぎりぎりセーフだな。…おい、そこ俺の席だぞ！」

男は竜馬の席にやって来てはいきなり竜馬を怒り出した。

「いや、あの、ここ僕の席だから…。君の席は前だよ…。」

竜馬は呆れて言った。

「お！ワリイな。同じ名字だからって勘違いしてしまったぜ。呂竜馬か…。まさか俺と同じ名字がこの世にいるなんてな…。」

竜馬は言っている意味がわからずポカンとしていた。その男は変な空気になりそうだったので、すぐに話を切り替えた。

「さつ、さあて、今日の受験、同じ呂同士頑張ろうぜっ！ちなみに俺の名は呂 猛^{りょもつ}だ。よろしくな竜馬。」

「ああ、よろしく頼むよ。猛君。（いきなり呼び捨てかあ…）」
猛は竜馬に君付けされたことを笑いながら言った。

「おいおい、君はないぜ？俺のことはフルネームでよんでくれ。その方が落ち着くしな。」

「わかったよ、呂猛…でいいんだろ？」

こうして2人はテスト前ながらも打ち解けあった。この出会いから2人はよきパートナーとして学校生活を共にしていくのである。

テスト開始のチャイムと同時に校内放送が流れ出した。

「受験生の諸君」。私はこの亜露霸高校校長の無窮^{むきゆう}じゃ。今からテストを開始するわい。最初のテストはこの高校から出ることじゃ。無事にこの高校の外に出られたものが2次試験に行けるのじゃ。く！では、よくいどんつ！」

と言つて校内放送は終わった。最初は誰もが理解不能なテストが始まった事に頭が混乱していた。受験生たちが黙って考えていると呂猛がその沈黙を破って言った。

「つてことは、さつさと学校に出ればいいんだな？竜馬、行こうぜ！」

「ちょ、ちょっと押すなよ！自分で教室くらい出れるから。」

呂猛は竜馬の背中をバンバン叩き押しながら教室を出て行つたと、同時に受験生が我先に外を目指して走り出した。

ついに受験が始まった。果たして、この最初のらくちんな試験に全員が何秒で終わるのだろうか…

竜馬と呂猛は廊下を走っていた。

しばらく走っているうちに竜馬は気付き口を開いた。

「呂猛君。ずっと同じところ走ってない？」

そう、2人はずっと同じ道をぐるぐる走っていただけだったのだ。

呂猛は先に気付いた事を言った。

「君付けすんなよ！」

呂猛は続いて驚いて竜馬に言った。

「え！？それやばくないか？もう他のやつら先に言って…」

「いや、どうやらみんなも同じ所走ってるみたいだよ。」

竜馬は呂猛の声をさえぎって言った。

「きつとどこかに脱出経路があるはずだよ。それを探そう。」

そうして2人は道を探し始めた。

他の受験生も早々と状況を察知して道を探し始めた。（超難関校だけあって学力以外の力もなかなかもっているようだ）

それから数分後――

竜馬は廊下の角においてある水槽でこそそしている男をみつけた。竜馬はその男に尋ねた。

「その水槽どうかしたの？」

男は慌てて言った。

「いやここには何も無いで。ただ、ちょっとぼうつとしてただけやで。」

男は少し関西弁だった。せきにじ

その男を脅すようにあとからやって来た呂猛は詰め寄った。

「おい、そこになにがあるんだ？ちよつとみせてくれや。」

呂猛は少し乱暴のようにも見えたが、

「服にゴミついてるぜ？」

とまあ、優しさもアピール（？）した。

竜馬と呂猛は水槽に無数の金魚が泳いでいるのを見た。男は2人に言った。

「ここに泳いでいる金魚の数を数えろって壁に書いてあるからずっと数えてるんやけどなかなかできんのや。」

「んなら俺に任せろって！これくらい楽勝だぜ。1匹2匹、3匹……」

呂猛は数え始めた。

数えている呂猛をよそに竜馬は男に尋ねた。

「自己紹介まだだね。僕の名前は呂竜馬。今数えている彼は呂猛。君の名前は？」

「自分の名前はトモナイ カズやで。よろしくでいいけ？」
「うん、よろしくカズ君。」

すると壁にあるスピーカーから声がした。

「今何時デスカ？0960番サン」
0960番とは呂猛の受験番号だ。

「あん？えっと、たしかあ……って何匹数えたか忘れたじゃねえかあ！畜生。」

呂猛が悪態をついているのを見て思い出したようにカズは言った。
「ああ、ワリイ、忘れてたけど数え終わる直前にいきなりスピーカーから声がしていつもミスるんやってなあ。忠告してるの忘れたわはは」

カズは笑いながら呂猛に言った。

「コノヤロー！ふざけんなよー！」

カズは逃げ、呂猛はカズを追いまわした。

取り残された竜馬は1人金魚の数を数え始めた。

そして終盤またスピーカーから声がした。

「今日八何月何曜日？0961番サン答エテクダサイ」

「51」

「違イマスヨ0961番サン。シツカリ答エライツテクダサイ」
「57! やった、57匹だ。」

竜馬は散々スピーカーの声を無視し、数えきった。するといきなり水槽が2つに割れ、隠されていた廊下が現れた。竜馬は未だにじやれあっている（少なくとも竜馬にはそう見える）2人を呼んだ。

「2人とも。置いてくよ?」

2人は本来の目的を思い出しすぐに竜馬の後を追っていった。

3人ともその廊下へ入ると開いていた壁が閉じた。

「どうやら他にも既にここに来ている人がいるみたいやで? でも、みんななんで気絶しとんやろ…」

カズは率直にこの廊下の疑問を口にした。

「きにしてもしょうがないさ、もうすぐ玄関だと思っし先を急ごうよ。」

竜馬はそう言って無視して先に進んだ。戸惑っているカズに呂猛は馬鹿にして言った。

「気絶してるやつに話し掛けるやつはアホだぜ?」

結局3人は玄関まで直行した。

玄関――

ここに3人の男の受験の補助員がいた。

肉体派とのつぼ、あとオタクな3人であった。

肉体派の男がいった。

「よくここまでたどり着いたな。ここが最後の関門だ。我々と勝負し、勝った者のみが外へ行ける。さあ、誰から勝負するか?」

「よし、俺が最初に行く!」

言ったのは呂猛だ。勢いよく飛び出した。肉体派の男は自信気に言った。

「よかるう、貴様からか。私と格闘し、勝てばいいのだ。分かりやすいだろう?」

こうして呂猛と肉体派の男の戦いが始まった。

5分ほど激しい攻防戦を繰り広げた。

「呂猛、勝てるかなあ？相手はなかなかの肉体美やで？」

カズは不安げに竜馬にすがるように尋ねた。

竜馬は、

「戦いは、肉体美だけじゃ勝てないさ。僕はきっと呂猛が勝つって信じてるよ。」

肉体派の男の重いパンチが呂猛のわき腹に入り、呂猛派下駄箱に吹っ飛ばされ、下駄箱がぐしゃぐしゃになり、呂猛は埋もれて見えなくなった。

肉体派は勝利を確信して近づいていき見えない呂猛に言った。

「貴様は今のところ今回の受験生の中ではトップクラスの強さだな。だが、所詮私には勝てんのだよ。さて、次は誰が私の相手をするのだ？」

すると、肉体派の足元が突然震え出した。

「なんだ？一体何が…」

喋り終わる前に1人の男が下から飛び出し、そのまま肉体派のあごにクリーンヒット！ああ、これは痛い。

肉体派は一気にノックアウトした。虫の息の肉体派は氣力を振り絞り呂猛に尋ねた。

「き、貴様の名は！？…」

「呂猛だ」

「そうか…どうりで…」

肉体派は氣を失った。

「死んだんけ?!」

いや、だから気絶だカズよ。

勝利した呂猛は2人が勝つことを確信でもしているのか普通に去って行った。

「なにも言わねえが、わかってるよな？んじゃ先に待ってるぜ。」

それは暗に勝って来いと言っているようだった。

オタクの男が喋りだした。

「君は合格だね外に出ていいよ。さて、次は誰が僕ちゃんの相手をするのかな？」

カズはその口調に引いていた。すると竜馬が前に出て言った。

「では僕が相手をします。一気に勝たせてもらいますよ？」

するとオタクは目を丸くして言った。

「何言ってるの？僕ちんとの勝負はフィギュア作り対決だよ？2分で多くのフィギュアを作ったほうが勝者だよん」

カズは吐き気を覚えそうだった。竜馬はそれを了解し、早速フィギュア作り対決に入った。

世のオタク達が好むフィギュアを2人は作っていた。

2分が経った。どうやらカズには長い長い2分だったようだが…終了すると今まで無言だったオタクは喋った。

「はい終了」僕ちんは240完成させたよん。君は…ん！君はたった1つ、しかもまだ少ししか出来ていない！君は僕ちんを冷やかに来たのかい！？」

オタクは激怒した。

カズはオタクの怒りようの凄さに竜馬に謝ることを薦めた。

「竜馬、謝ったほうがいいで？さすがにこれは失礼だと思っで？」

しかし竜馬は首を横に振り怒り狂っているオタクに逆に怒った（つまり逆ギレだ）

「あなたが一番謝るべき人だ！」

驚いたオタクは竜馬に尋ねた。

「なぜだ！？僕ちんは君に謝る理由が無いよん！」

「違う。フィギュアにだよ。あなたは確かに作る速さは一級品です。でも、速さが大事じゃない！フィギュアの1つ1つのパーツに思いを込めて作るのが大切なはずです。」

その言葉にオタクは心を打たれた。「そうか。僕ちゃんは間違っていたんだ…。ありがとう君。僕は頭がどうかしてたよ。君の勝ちだ。外に行ってもいいよん。」

おかしい。明らかになにか違うことになっている。カズはそう思った。でも、その時のカズもまた、2人のやり取りに感動し、突っ込む事を忘れてしまった。

最後の1人、のっぽが口を開いた。

「最後に残った君と僕だね。では最後の勝負を…と、君まだいたのか？もう行ってもいいだぞ？」

まだいたのは竜馬だ。

「いさせて下さい。最後を見て、一緒にゴールしたいんです。」のっぽはその気持ちを察して竜馬の居残りを許した。

「そうか、わかった。では、最後の勝負はジャンケンだ。」

「え？…」

竜馬とカズは混乱した。

カズはのっぽに聞いた。

「ホントですか？もつと激しい物とおもったんやけど、それですか？」

だが返事は「ああそうだ。」「僕はこんな時に嘘はつかない。」と帰ってくるだけだった。

「だが、ひとつやる前にヒントをやるう。僕はグーを出す。君はパーを出せば勝てるぞ？」

竜馬は畏だ！と感じ、全く気付いていないカズに叫んだ。

「カズ！それは畏だ！間違ってもパーを出したら負けるぞ！」

しかし、非情にも決着はついていった。

カズは勝っていた。カズはチョキを出していた。のっぽはパーだったー。

「いえい♪勝った勝った♪行こうぜ♪竜馬。」

カズは大喜びして竜馬と共に外へ向かった。

去っていくカズにのっぽは愕然としながら言った。

「バ、バカな！？ヤツは裏をかいてグーを出すと思ったのに…。なぜ僕の作戦がわかったんだい？教えてくれないかな？」

カズは自分なりにカツコよく言って高校から出た。

「智者は智に溺れるのさっ（笑）」

外では呂猛が待っていた。

「意外と早かったんだな。らくしうだったのか？」

竜馬は苦笑いしながらも答えた。

「そんなところかな？詳しくはカズにきいておいてよ。」

「のっぽがべちゃくちゃ喋ってたけどボーっとしてたらなんか勝ってたって！」

カズの返事はこれだ。

（？）

呂猛の頭の中はただ？マークが出ているだけであつた！。

0 話：始まりは受験（後書き）

今回は受験後のお話。

合格者の登校日（3月下旬）だった！

0・5話：宿題と神様と

2次試験、3次試験、面接と多少の苦戦はあったものの竜馬、呂猛、カズ、3人は難なくクリアしていき、合格通知も届き、いよいよ亜露覇高校の生徒となる事が決まった。

3月下旬―。

3人は各中学の卒業式を終え春休みに入り、合格者登校日となった。

この合格者登校日では高校で制服、校章等の支給や宿題が各合格生に課される。

亜露覇高校で3人は再び顔を合わせた。

「よつ、竜馬にカズ。3週間ぶりだな。高校始まったら仲良くやってこうぜ!」

呂猛は相変わらずの調子である。

「やけど、実際クラス分けは入学式やでまだ同じクラスか分からないで?」

痛いところ突っ込むのはカズだ。

「相変わらずやな2人とも。さて、今日はまず制服とか貰いに行こうか?」

竜馬はそう言って2人を連れて制服等を貰いに体育館にある会場に向かった。

支給される会場ではナレーションの私がここに書くのも変だが肌が透き通るような白さの美人な先生が合格者に配っていた。

それを見た呂猛が言った。

「おつ!あの人は四条^{しじょう}先じゃねえか。噂どおりの美人だな…胸が無いのも噂通りか…」

とりあえず一行は行列に並んで受け取った。

カズは赤面している。何もされていないのに照れているのだろうか…？

続いて呂猛が受け取った。

「先生、宜しく！」

すると返事が返ってきた。

「あ、猛君じゃない。あなたの話はあなたのお兄さん達からたくさん聞いているわよ。」

「先生、あんなやつらの話は嘘だから絶対に信じたらダメだからな！」

なんかちよつとじゃれあっていた…。

そして竜馬は―

普通だった。

校章も受け取ったが赤いことに竜馬が疑問を持った。

が、その謎を聞く前にカズが説明した。

「この赤はやっぱ競争率が3倍やでなあ。3倍と言ったら赤！これ基本やなつ。」

竜馬は他の人も普通に知っていると思い、カズの言葉に心から感謝していた。

その後、校長（無窮）のした後、教頭から一言があった。

「わしは亜露霸高校教頭の十四創滅じゅうしゅうめつじゃ。お主たちは合格した時からここ亜露霸の生徒であるのじゃ。なので今から配られる宿題は入学式までに終わらせるように。お主達を信用していないわけではないのじゃが、他人のを真似ないように1人1人宿題は違うので覚悟しとくように。」

そう言って合格者達に宿題の内容を書かれた紙が手渡された。

呂猛は小声で呟いた。

「なんで爺さんばつかなんだこの高校は…。そろそろ新任の若い先生くりゃあいいのになあ。無理だろうけどな。」

竜馬はその意味がわからず呂猛に尋ねた。すると呂猛はこう答えた。

「名字が変な名前だろ？あれは神様だからさ。つま、基本そんな若い人がなれるわけ無いから無理ってわけ。」

なるほど。竜馬はそう感じるのであった。

長い長い注意事項の話を経て、ようやく終わった。

違う場所にいたカズと合流し、3人で体育館を出た。

「俺の宿題九九×九九の暗記やったけど、みんなどうやったけ？」

カズは自分の宿題内容を言い、2人に聞いた。

呂猛は紙を見て笑って言った。

「俺はマグロ釣って来い5匹！だとさ。なかなかの難しい宿題だな」

カズも笑いながら言った。

「ホントやってな、こんなふざけた内容で高校やってけるんけ！？って言いたいでこれ。竜馬は？」

竜馬は自分もアホらしい内容と思って紙を見た。だが、そんな期待をするもんじゃないと思い知らされる事になるのだった。

「ん？なんだこれ？」

竜馬の第一声。そして第二声は

「な…これって。」

だった。

2人はお互いの顔を見合わせ竜馬の紙を見た。

そこには堂々と書いてあった。

【龍の首の珠】

2人とも全く分からなかった。それを察した竜馬は説明した。

「これは竹取物語の話で出てきたかぐや姫の無理な指令だよ。持ってきたら結婚するってやつ。まあ、無理だったけどね。」

呂猛は理解できなかったが、カズは理解した。

「あれかぁ！た、確かに無理難題極まりないな…。でもこれ取っ

てこんとあかんのやで？」

呂猛も空気で竜馬をフォローした。

「大丈夫だろ？ 竜馬は今まで俺たちと一緒にクリアしたんだしな。まあ、難しいのはドンマイドンマイ。」

呂猛のフォローのような言葉は竜馬にとって皮肉にしか聞こえなかった。（かわいそうだなオイ！）

頭が真つ白の竜馬と2人は玄関前に来た。

そこでカズと中学生くらいの水色髪の小さな少年がぶつかった。

「イタ！ 君、遅刻？」

カズは痛さよりも相手の心配をしたようだ。

「いや、俺は違う。」

そう言って少年が立ち去ろうとしたので呂猛は肩をつかんで引き止めた。

「おい！ ぶつかっておいてなんだよその態度は！？」

「だまれよ、俺を怒るのか？」

少年が挑発的な態度だったので呂猛は怒った。

「お前、ふざけんなよっ！」

呂猛が殴りかかろうとし、少年も身構えたので竜馬は事態を収拾しようとした。

「2人とも、こんなところでやめようよ。先生も校内にいることだし、って先生来たよ？」

やってきたのは四条先生だ。

呂猛は止めようとした。しかし、少年は態度を改めなかった。

「俺は関係ないぜ？ お前が止めるなら俺はやらないがな、こんな茶番。」

呂猛がムツとして一言言おうとした時、四条先生が割って肅清した。

「桜ちゃん！ なんで今頃来たの？ ダメじゃない。」

「先生、知り合いですか？」

竜馬はビクリして尋ねた。

四条先生も少し驚いた。

「知り合いつて言うより、あなたたちの先生よ？」

「…。」

呂猛は一言も喋れなかった。

「もう！桜ちゃん校長先生が怒ってるわよ？」

「あーもう！桜ちゃんはねえだろ！？俺は八重桜^{やえざくら}だ。」

「いいの、桜ちゃん。さ、行くわよ。」

そう言つて2人は去つていった。

全くこの亜露霸高校は恐ろしい。

あんなに若くても神様は神様なのである…。

カズは呟いた。

「桜ちゃんつて…。あの先生実は女…？」

いや、男である。決して男勝りの女の子ではない！

竜馬の胸中は希望と期待で胸がいっぱいだった。

（先生は神様ばかり…。父上、母上、兄上。ぼくも頑張ります。

ここで。）

まあ、帰宅すれば宿題に絶望するのだが、そこには触れないでおきたい。（見たくないのだ）

1話：入学式でも兄弟の茶番

カズの九九×九九の暗記

呂猛のマグロ釣り

そして、竜馬の龍の首の珠

3人はそれぞれの宿題を1人を除きあまり苦勞することなく完了して入学式を迎えた！。

4月初旬の亜露霸高校――

今日始めて在校生と出会う新1年生は春の穏やかな桜と違ってかちこちに緊張していた。一部を除いては…。

その一部である呂猛は明らかに周りの緊張感をもちもしていなかった。

「やつと入学かぁー。おっ、あれはカズじゃねえか！おーいカズ、もちろん宿題できてるよなっ！？」

少し冷やかし気味に呂猛はカズに呼びかけた。

「もちろんやで。自分がこれくらいの暗記くらい休み中にできるで。そっちこそできとんけ？」

呂猛は肩に提げていたクーラーボックスを自慢げにカズに見せつけた。

「ほらよっ。俺の家は裕福だからな！釣りついでにバカンスもしてきわ。にしても、他の奴らも随分と異様だな。」

他の1年生も色々な過酷な宿題で、大きなかばんを持つ者。変な日焼けをしている者。全身あざだらけとバリエーションが豊富(?)だった。

その中に1人、見覚えのある人を呂猛とカズは見た。

2人はその1人の人物に駆け寄って行った。

その人は見るも無残な姿だった。

髪の毛はぼさぼさ、ばんそうこうがたくさん貼ってあり、目のくまも悲惨なものだった。

呂猛は恐る恐る尋ねた。

「竜馬…だよな？」

「ああ、そうだよ、僕だよ…。」

竜馬だった。

竜馬は明らかに疲れているようだった。

「僕は、やったよ…。これがあれば、かぐや姫と結婚も、可能だよ…。ハハ…普通に無理なはずだよ…。」

全く…ド疲れさんっ！竜馬

入学式前にある程度人前に出れる姿になった竜馬は呂猛らと合流した。

「よしっ、復活。」

竜馬はどうしたのか元氣100倍並のパワーアップをしていた。ただ2人は竜馬の復活に首をかしげるだけだったが、そのうちそんな奴だと割り切った。

入学式により、再び長い先生たちの話の後、ついにクラス発表になった。

クラス分けの結果、3人は運命とでも言えるのか、同じクラスだった。

カズはボソツと言った。

「結局こうなるんやな。」

「でも一緒になれてよかったじゃん。頑張ってこ？」

竜馬はここぞとばかり反応した。

呂猛も笑い、付け加えるように言った。

「そうだな。なかなか俺たちいいトリオだしな。乗り切っていこうぜ！」

3人が喋っている所に2、3年生が2人やって来た。

「相変わらずだな。呂猛。」

落ち着きのある声の3年生の男が呂猛に言った。

「なんだ呂猛？それがお前の連れか！？中の上くらいな奴と特徴のなさそうな貧相な男か。おもしろいじゃねえか。」

番長風なムキムキな2年生の男が呂猛を侮辱する感じに言った。

呂猛はそれを反論した。

「王兄貴だつて今時番長気取りなのは時代遅れだぜ！？一匹狼なんてダサいぜ全く…。筋肉バカなくせによ。」

それが引き金となつて呂猛と男は喧嘩になった。

全く、場所をわきまえて欲しいものである。

そんな2人をよそに、3年生の男が呆氣に取られている竜馬と力ズに話し掛けた。

「彼らはほつといて構いません。紹介がまだでしたね。私は呂虎りよこです。そしてあそこで呂猛とドンパチをやっているのが呂王りよおう。私たちは名字の通り、兄弟です。」

呂虎の自己紹介は隣で喧嘩しているにも関わらず、実に落ち着いていた。

竜馬と力ズは仰天した。

どういう環境で育ったら一番上の兄と間逆な性格になるのだろうか…。

もちろん2人は呂虎に挨拶をした。

「呂竜馬です。これから同じ学校の生徒としてお世話になります。宜しくお願いします。」

呂虎は名字の呂に疑問を抱いた。

（まさか呂の名字を持つものが我々以外にいたとは…。これはどういうことなのだ？）

考えていた呂虎の代わりに呂王が口をはさんだ。

「お前も呂の名字を持つのか！？へえ、珍しいこともあるもんだ。」

「隙あり！」

呂猛は余所見している呂王へ殴った。

が、呂王は顔面ギリギリのところまで呂猛の拳をつかみ、力でねじ伏せた。

「甘いな、猛！俺様に勝てると本気で思っているのか？」

呂王は呂猛をあざ笑った。

「うるさい王兄貴！俺は絶対兄貴を超えるからな！」

呂猛は吼えた。

呂虎はいきなり2人の間に介入した。

「2人とも見苦しいぞ。王、お前も自分のクラスが帰っていることくらい見ておいたらどうだ？」

ハッと思い出した呂王を連れて呂虎は去っていった。

「王。お前は無駄に口をはさむな。言っていることと悪い事がある…。」

呂の名字のことである。

こうして入学式は終わったー。

もちろん宿題も全員合格として終わった。

これから学校生活は始まっていく。

果たして3人の運命はどうなっていくのだろうか…。

別に死ぬわけではないが、今後が気になるところである。

呂虎と呂王が去ってからカズはずっと悲しみに満ちていたー。

（自分って貧相なん…？！ってか、絶対忘れてたよね呂虎さん…。自分の自己紹介してないんですけど！）

そう思うカズであった。

ポーカーフフェイスな彼の切実な思い等を理解してくれる人はまだいないー。

2話：授業開始！呂猛と夏侯惇

高校生活始まって最初の授業の日の話―。

竜馬家―。

竜馬は目覚めた。

1階のキッチンからは食欲をそそるいいにおいがする。

「竜馬。そろそろ起きないと遅刻ですよ？」

この声は竜馬のたった一人の家族であり、1つ年上の兄の呂瀬戸である。
瀬戸

「もう起きてるよ兄上。すぐそっちに行く。」

2階の自分の部屋にいる竜馬は着替えるとすぐに1階へ降りて食事でありつこうとした。

それを様子を見た瀬戸はすぐさま竜馬に言った。

「竜馬、顔を洗うのが先です。」

なんとも誠実な兄である…。

「今日から竜馬は授業が始まりますね。ちゃんと準備できているのですか？」

瀬戸に竜馬はもちろん！と手をグッドにして答えた。

「当たり前だよ兄上。僕だってそれくらいできているさ。兄上こそ仕事の準備できてるの？」

瀬戸はなんと竜馬の1つ年上なのに働いているのだ。まあ、でないと普通金銭面で苦しむからねえ…。

「私は問題ないですよ。今日もばっちり働いて稼ぎます。」

「兄上…僕の為にお金を稼いでくれてありがとう…。」

冒頭から兄弟愛過ぎだな、おい。

しかしその時玄関のドアを叩く音がした。

ドアの向こうにいるのは瀬戸の仕事の親方、親父である。
おやじ

「おい瀬戸！そろそろ仕事に行く時間だぞ！？」

「はい親父さん。もう今出るところです。」

そう言つと瀬戸は玄関のドアを開けた。

「よし行くか！おつと、竜馬じゃねえか！竜馬、ちゃんと勉強してくんだぞ？」

「了解親父さん。僕はそれが仕事ですからねえ。」

あいさつも程々に瀬戸と親父は去つて行つた。

1人残つた竜馬は食事を終え、身支度を整え次第学校へ向かうのであつた。

登校完了時間まで10分前――。

学校までが遠い竜馬家は時間がかかるのであつた――。

今日の学校は一段と騒がしい……。そう竜馬は思っていたが、実は自分の教室がうるさいだけであつた。

その騒がしい教室に入ると見慣れない顔の女性と呂猛がもめていた。

その女性は髪を後ろに一つ結び、そしてとても印象的なのが彼女は右目に眼帯をしているところである。

「夏候惇！結局なんでお前がここにいるんだよ！？」

「侵害ね呂猛。私は別にあんたいるいななんて関係ないのよ。」

私は行きたい所に来ただけ。」

「ぬうう……。ここは普通とは違ふんだぞ！？女のお前が来る事なんて、ないだろ？」

「他に女はあなたのご想像より大勢いるわ？それに普通とは違ふのを知らずにこの高校に来るわけじゃないじゃない！」

酷い荒れようだ……。

教室の真ん中で2人は言い争い、他の生徒は固唾を飲んで見守つていた。

その見守り組の中にカズの姿があつた。

竜馬は状況の説明をしてもらおうとカズの元へ寄つて行つた。

カズは静かに言つた。

「呂猛と言いつ争っているのは夏候惇かこうとんやで。自分も2人がどういう関係かは知らんわ。」

それを実は聞いていた呂猛が訂正した。

「俺はコイツと関係は無いぞ！つか、なんで俺がこんな奴と関係なんか…」

さらにそこに夏候惇が入ってきた。

「そうよ！私もこんなバカなんて知らないわ。」

このままではいつこうに終わらない…。そう感じた竜馬は事態の収拾を図ろうとした。

「御2人とも。今日はこれくらいにしようよ？もうすぐ授業だし、学校始まって早々もめることないじゃないか。」

「そうやって。続きはまた来週…」やで？」

カズの援護は教室の空気を悪くした。

一瞬の沈黙の後カズは呂猛にバカにされた。

「おいカズ！おめえがフォローしても面白くないぞ？」

「いや、別にウケ狙ってないで？」

カズは半分嘘をついた。（ウケを狙っていたのは当たり前だった）
結局そのまま言い争いを続けていると教室に1人の先生が入ってきた。

その先生は薄紫の髪の毛だった。

「この教室は随分とにぎやかですね？さて、そろそろみんなは席についてもらおうかな？」

生徒達は各自自分の席に向かった。

夏候惇も席に戻ろうとした所を呂猛が夏候惇の背中に向かって言った。

「静かに過ごせよ？」

夏候惇は自分の席まで来ると呂猛の方へ向いて言った。

「入学式に今日みたいなこと言ってくると思ったんだけど、あなたは鈍感なのね…」

クラス発表は確かに入学式だった。

その時になぜ呂猛が気付かなかったという…？

（あいつに「誰が同じクラスかしっかり見てなかったぜ！」なんて言えねえ…）

と、言う事である。

とりあえず何か言い返そうとした呂猛を先生はさせなかった。

「呂猛君？君の席はあそこだよ？」

その親切な言葉に大胆に逆らえる呂猛ではないので素直に席に就いていった。

それからチャイムがなり授業が始まった。（先生は多少早く教室に來たようだ）

授業が始まるとまず最初に先生の自己紹介からだった。

「僕の名前は一之瀬いちのせと言います。僕は普段から早めに教室に入ってきます。なのであまり今日みたいなことを休み時間中やってないと席についてくれると嬉しいな。」

一之瀬先生…あつという間に和やかなムードを作り出すとは…なかなかの素質である。

「質問はあるかな？可能な範囲で答えようと思うけど。」

その言葉にカズが食らいついた。

「先生の名前は一やけど、それってなんか意味あるんですか？」

普段おちゃらけているカズであるが、こういうときは意外と真面目である。体の中にオン・オフスイッチでも入っているのか？

「無いですよ？よく少ないほうが偉い多いほうが偉いなど色々な噂がありますが、数字に関しては校長先生の適当な振り分けでたま僕が一なだけです。」

振り分け？本当の名前は別にあるとでも言うのだろうか…？が、そこには誰も突っ込まないのがこのクラスである。（っていうか気付いてない人が意外と多かったり？）

「他に質問はありませんか？」

更に他の生徒が質問した。

「先生には恋人とかいますかあ？」

早くも色恋沙汰か…

「えーっと、その質問ですかあ…。一応僕にもいるね。」

「相手は！？」

早い反応だ。

「それは秘密だね。他に質問はありませんか？」

一之瀬は上手くその場を言い逃れた。

こうして自己紹介も終わると早速授業が始まった。

数学の授業だ。

一之瀬は知的なメガネをかけているだけあって、教え方も知的だ。竜馬はこれが神様なんだなと感心するのであった。

そうしてあつという間に1時間目は終わっていった。

この後も授業はある（1日7限が基本である）が呂猛と夏侯惇はあと2回も言い争いをして1日は終わった。

帰りは3人一緒だ。

呂猛が先に別れて竜馬とカズ2人で帰っていた。

竜馬はカズに2人について話した。

「どうしてあの2人ってあんなに仲が悪いのかなあ？そのうち殴り合いにならないかと思ったらいいけど…」

本気に心配しているように見えたカズは竜馬の不安を和らげるように言った。

「多分大丈夫やって！ケンカするほど仲がいいってな。」

かずは笑っていた。
が竜馬にはその笑いはなぜか全く理解できなかった。（っていうか、反応鈍いな）

夏侯惇の帰り道―。

前からあからさまに悪者の人物が数人やって来ては取り囲んだ。

「お譲ちゃん、僕達と楽しい所に行かないかい？」

「断ります。私の家は門限が厳しいんです。それでは。」

無視して通ろうとした夏候惇に1人が腕をつかんだ…。

呂猛は悪い予感がしていた。

なので2人と別れた後、夏候惇の後を追っかけていた。

遠くに夏候惇の姿が見え、数人の悪者の人物が取り囲んだのを見て急いで向かった。

悪い予感的中したのだ！

（このままではまた同じことに！そうはさせねえ！）

そう呂猛は思いつつ急行した。

だがとき既に遅しだった…。

その場に悪者の人物たちの姿は無かった。

だが、夏候惇の姿はあった…（？）。

呂猛は呆気にとられていた。そして夏候惇に聞いた。

「さっきの奴らは！？」

「泣いて逃げ帰った。」

呂猛はますます不思議に感じた。

「どうやってだ？」

「呂猛。私はあれから成長してないわけじゃないわ。だから、ストーカーなんてしないでよ！」

夏候惇は怒っていた。だが、笑ってもいた…。

呂猛はびびった。

「いや、俺はてつきり…」

夏候惇は微笑んだ。

「心配したのには感謝するわ。んじゃまた明日。」

そう言い残して帰っていった。

「フツ、感謝なんているかよ。」

呂猛は独り言を言つてその場を後にした。

道草していった呂猛が早く帰れるわけもなく、家に着いたら呂虎にこっぴどく叱られるのであった。泣

3話：レクリエーション（前編）結成！無敵チーム×2

高校始まった週末の7限目ー。

今日は新入生の歓迎というの名目のレクリエーションだ。

竜馬らのクラスも集まり始まった。

そのレクリエーションでは入学式以来の全校生徒集結である。

レクリエーション自体はこの高校にしては普通であった。

レクリエーションの中に「サバイバル」という題目があった。（普通…なのか？）

その時に竜馬らのクラスと隣のクラスの合同作戦ということになった。

最初に一之瀬からの言葉があった。

「今回は隣のクラスと合同作戦をします。各自これを機にしっかりとコミュニケーションを取ってくれと嬉しいな。」

その後赤髪に紫のバンダナをした隣のクラスの担任が一之瀬に言った。

「一之瀬さん、話はそれくらいにしてさっさと本題をはじめましょうか。」

「そうだね。っとその前に自己紹介。僕の名前は一之瀬です。よろしく頼むよ。それでこの人は二宮^{にのみや}。まあ、僕の相棒ってところかな。」

二宮はA組に挨拶した。（A組とは竜馬らのクラスのことだ）

「俺が二宮だ。隣のB組の担任をまかされている。宜しく頼む。」
そんな中ルールの説明があった。

年は十四創滅と同じくらいで髪が年齢にしてはちょっと稀な真っ黒な髪で、背中までのびている男が体育館のステージに上がって言った。

「あ、あ……。いいか、ルールの説明をする。その前に1年の諸君に自己紹介をしよう。ワシの名は十二音階^{じゅうにおんかい}だ。では、ルールの説明をする。」

そう言つてルールの説明を始めた。

竜馬は何の仕事をしているのか知りたくて前に並んでいる呂猛に尋ねた。

しかししまいち納得のいく答えではなかった。

「え？ああ。教頭に匹敵するほどの力を持つてんだろつな。俺は兄貴たちの話をよく聞いてないからよくわからんけどな。」

苦笑いして呂猛は言つた。

ルール説明が終わると組み合わせ抽選が行われた。

このサバイバルはA、B合同――。

なわけで2つのクラスから適当に振り分けられるのである。

――之瀬が箱を持つてA、Bクラスに言つた。

「ではこれからメンバーを決めてもらうけど、この箱の中にある紙をとつて下さい。そこに数字が書かれているので同じ数字の人がメンバーです。では最初はA組から行こうかな。はい、どうぞ。」

そう言つて生徒達は箱の中の紙を取つていった。

「先生、何枚ですか？」

いや、普通1枚でしょ！つて突つ込みたい質問はカズだ。

「それは……何枚欲しい？」

――之瀬は笑つて言つた。

「んー、やつぱ1枚かな、へへ。」

（先生……できるやんけ）とカズは思いながら箱の中に手を入れた。

全員とり終わると同じ数字同士の生徒達がくつついていった。

呂猛は竜馬に番号を聞いた。

「竜馬は何番？」

竜馬の紙には6番と書いてあつた。

「呂猛は？」

「ああ、一緒じゃねえんかあ。俺は9やったぞ。」

竜馬は紙を見て違和感を感じた。

「これおかしくない？」

「どこがだよ。これは9番って……！」

上下逆だった……。

カズもやって来て番号を尋ね、尋ね返された。

「自分は10番やったわ。……俺1人だけかあ……。」

「まあ、落ち込むなって！」

呂猛のフォローだ。

「大丈夫だよ。きっといい人が見つかるって。」

思いやりがこもっているのは竜馬のフォロー。

「確か3人一組のはずやし、探そうか。行こう、呂猛。」

「そうなのか竜馬、俺聞いてなかったでしらのやってな。」

相変わらずの呂猛で……

「相変わらずね、呂猛。しかもあなたと同じ……先が思いやられるわ。」

ナレーションの私を差し置いて言うとは……！あ、これは夏侯惇です。

「何っ！？お前と同じか……！」

呂猛がそう言っているのを無視して夏侯惇は竜馬に挨拶した。

「これでは2・1人だけど、2人で頑張ろう。よろしく、呂竜馬さん。」

「あ、宜しく、互いに頑張ってこうね。夏侯惇さん。」

竜馬の呂猛の無視っぷりもなかなかの面白さである。

決まり悪い呂猛はカズに話し掛けるのだが……

「なんだよ！無視かよ2人も。なあ、カズっておらんやん！」

カズは既にその場を立ち去ってパートナー探しに行っていた。

この「2・1人チーム」ハンディをどう補っていくのか、これが

らの見物である。

「おい！俺は0・1か！？そうなのか？！そうだろ！？このナレ
ーションが！」

呂猛サンはお怒りなので私も無視してカズの方へいくとした。（
byナレーション）

カズも同じ10番の味方を見つけた。

「それ10番やる？」

カズは男に聞いた。

「はい、そうです。では、あなたが拙者のパートナーですか？」

男も聞いてきた。

「そやで。」

カズらしい返事だ。

「宜しく御願います。拙者の名は馬趙雲ばしやうつんです。あなたの名は？」
大変礼儀正しい。ご立派だ。

「おれかぁ。我が名はトモナイカズ。宜しく頼むぜい！」

カズも調子を合わせて（？）対応した。

「んじゃあと1人いるはずやで探そうか。」

2人はあと1人を探そうとした。

その時二宮が生徒達に向かって言った。

「1つ言い忘れたが、10番は今日の欠席者の関係で2人だ。頑
張れよ、健闘を祈るぞ。」

「。。。」

「。。。」

2人は沈黙した――

「…ま、まあ、少数精鋭っていうで、大丈夫やろ。多分。」

「そうです！少数精鋭は選ばれし者が任命されるものだから。」

2人とも懸命に自分のチームをフォローする姿は似ているものだ。

さて、いよいよ戦いの火蓋が切って落とされる！
最後まで残れるのだろうか。

「2・1人チーム」

「ザ・少数精鋭」

君たちの頑張りに期待する！

— つづく —

0・8話：龍の首の珠（前編）2人の少女との出会い（前書き）

これは竜馬の宿題の後日談です。

登場人物の関係上2話以降に読むことをお勧めします。

0・8話：龍の首の珠（前編）2人の少女との出会い

竜馬の宿題―。

【龍の首の珠】

竜馬は一生懸命に家の中の書物をあさった。

しかし、龍の首の珠に関する記述のある本は無かった。

（こここの家の書庫は大抵なんでもあるのに：本当に存在しない物なのかも）

竜馬の脳裏には不安を覚えた。

春休みも残す所約4分の1。そろそろ取りに行きたいところである。

瀬戸は久しぶりに家に帰ってきた。

竜馬の登校日の少し前に仕事で出張に行つて以来しばらく家にいなかったのだ。

帰つてきた瀬戸は竜馬の様子を見てなにか一大事なことがあるとすぐに察した。

「竜馬、その慌てよう、どうしたんですか？」

悩んでいた竜馬ははっと我にかえった。

「あ。兄上、お帰りなさい。実は宿題なんだけど、龍の首の珠のことが書いてある本つて無いかな？」

「そんなものが宿題なんですか?!」

瀬戸は随分と驚いた。

「それだったら、もう1つの書庫にありますね。」

「もう1つの書庫？」

家には1つしか書庫はない。竜馬は2つもあるとは全く思つてなかったのである。

「すいませんね竜馬。もっと早くに帰つてこれればよかったもの

の。」

「いいんだよ兄上。それより早く早く！」

瀬戸は家から出ると数分後帰ってきて竜馬に1冊の古びた本を手渡した。

その本は見るからに年季物である。

瀬戸は本を渡すとニコツツと笑った。

竜馬は本を開いた。そこには当時（竹取物語が作られた時）のこととが事細かに書かれていた。

「どうです竜馬？ 私たち呂一族の宝の一つは。」

「ありがとう、兄上。これで僕は頑張れるよ！」

そう言つて竜馬は2階の自分の部屋にこもつて読みふけた。

ついに準備は整った。

竜馬は古びた本に書いてあつた龍の首の珠の在り処を知り、翌日朝早く旅立とうとしていた。

そんな竜馬に瀬戸はあるものを渡した。

それはもう1つの書庫にある料理レシピの本に書いてある料理の1つ「黍団子^{きびだんご}」である。

「竜馬、これは桃太郎にも出てくるきびだんごを模した黍団子です。あの物語ほど素晴らしいものではありませんが、きっとあなたの役に立つでしょう。」

実はこれ、瀬戸が徹夜で作ったものである。

「何から何までありがとう兄上。出発前に涙が出そうだよ……。（感動）」

気を取り直して――。

「では、行つて参ります兄上。」

そう言つて竜馬は家を後にした。

ここは日本アルプス、飛騨山脈――。

竜馬がたどり着いたのはここだ。

眼前には大きな大きな山が見える。

その山に竜馬の目指す龍の首の珠は存在する。

山に入る前に竜馬は食欲が出てきたので昼ごはんにした。

そして、食後は瀬戸から渡された黍団子だ。

竜馬は黍団子を2つ食べた。

「これは…、う、うまい、美味すぎる！兄上、感謝します。」

黍団子は口がとろけそうなほど甘く、また、体の疲れが一気に吹っ飛び体力全回復！だった。

これが黍団子の力なのだろうか…。

食べ終わったところで竜馬は山へ向かった。

麓には小さな村があった。

今の時代には似合わない家ばかりである。

山へ入ろうとした竜馬に中世を彷彿させる紫色の服装の独りの少

女が声をかけた。

「あなたはこの山へ入るのですか？」

「うん、そうだけど。」

「なぜ入るのですか？ここは危険な場所。何も知らずに上るような山はこの辺りにありません…。」

「そうは言っても、僕は龍の首の珠を取ってこなくちゃいけないんだ。」

竜馬は宿題なので引き下がるわけにはいかなかった。

その様子を感じ取った少女は話し合った結果ついに折れた。

「分かりました…。危険を承知で山に入るなら私たちも加えてください。あらゆる面で貴方を助けられると思います。」

竜馬は質問した。

「私たち？」

「はい…、私には姉がいます。ついてきてくれませんか？」

そういうと少女は自分の家に向かったので竜馬はついていった。この少女の家も周りと同じく、時代に取り残された家であった。

家に少女が入っていったので竜馬も入った。

「お姉ちゃん、彼が山に入るようです。」

「僕の名前は呂竜馬です。山に入らせてくれませんか？」

家の中には同じ年、同じ感じの服装の少女がいた。服の色は赤色だ。

その少女は笑った。

「相変わらず暗いわよ？」

そして竜馬の方へ顔を向けて言った。

「貴方が山に入る人ね。あたしはフレア。そしてその子はあたしの双子の妹トスーゴ。妹を説得できる人だから心配はいらないですよ。では、少し待って下さいね。直ぐに準備をするから。」

そういつて2人の少女は身支度を始めた。

竜馬は少女たちを見ながら物語の中に入っただのではないかと不思議な感覚を覚えた。まあ、普通だろう。

準備が整ったので3人でついに山に入った。

まるで竜馬は少女たちの兄のようである…。

トスーゴは真面目で黙々と山を登り続けた。

反対にフレアは散々はしゃぎまくり、竜馬になんで山に入ったの？年はいくつ？彼女はいるの？など色々なことを尋ねたりした。

竜馬もフレアに尋ねた。

「トスーゴちゃんはなにかあつたの？」

トスーゴの性格に疑問を持っていた竜馬はフレアに小声で尋ねた。フレアはトスーゴの耳に入っても構わないらしく注意を払うことなく竜馬に言った。

「トスーゴは人見知りなの。あたしたちの村は元々人なんてほとんどいないし、全く人はやってこないから。それに…」

何かを言いかけて言うのを止めた。

竜馬はそれを追求しようとはしなかった。

しばらく歩き続け、日も暮れてきた。

目的地は意外と遠いようである。

しばらく森の中を歩いていたがやがて大きな湖に出た。

「ねえ竜馬！今日はここで野宿しようよ。」

フレアは竜馬にねだった。

「そうだね、今日はここで寝泊りしようか。トスーゴちゃんもおいで、晩御飯にしようよ。」

竜馬は夜も歩くわけにはいかなかったので野宿する事を決めた。

晩御飯を済ませた。

するとフレアはいきなり服を脱ぎだした。

竜馬はあまりにもいきなりの出来事だったのでだいぶ驚き、赤面した。

「ちょ、フレアちゃん、いきなり何を…？」

フレアはにやりとして竜馬に言った。

「あれ？竜馬どうしたの？そんなに赤くなっちゃって」。美少女の体がそんなに珍しい？」

「自分で美少女って言うんだ…。」

「もう！トスーゴうるさいわよ！」

トスーゴの突っ込みにフレアは怒った。

竜馬はそれが面白かったので笑った。

顔はそむけたままフレアに言った。

「とりあえず服を…。」

「今から泳ぐの！ねえ、いいでしょ竜馬あ？」

「わかったよ、だからちょっとこっちないでっ。」

「焦った焦ったあゝ。じゃあ行ってきたゝす。」

フレアはそう言って湖の中に入っていた。

竜馬はトスーゴも入らないのか聞いた。

「私はいいです。」

拒否られた…。

竜馬は泳ぎはしゃいでいるフレアを横目にトスーゴに名前について聞いてみた。

「トスーゴちゃん、なんで君とフレアちゃんは少し変わった名前なの？」

トスーゴはいきなり質問され、こつちを見られたので照れてうつむいて答えた。

「私たちは、元々、名前が無かったんです。だから、村にいる数少ない人たちに、名前を…」

湖の方からフレアの声がする。

「ねえ！竜馬あ！一緒に泳ごうよあ！」

「えつと、また今度ね。」

竜馬は曖昧な返事をしておいた。

「なんだよう。竜馬のケチイ！フンだ。」

フレアはそう言ってまた湖の中に消えた。

竜馬はトスーゴと話を続けた。

「でもねえ…。なんでそんな特殊な名前なんて付けたんだろう…？」

「それは私たちの能力が…」

―バッサン！！

トスーゴが言い終わる前になにか大きな湖から音がした。

とても大きな魚である？か、怪物だ！これは一見魚にも見えるが、モンスターだ！

そして1人が湖から出てきた。

「ワアン！竜馬、トスーゴ助けてー！」

フレアだ。

「ええ！？」

竜馬は状況が読めなかった。

そりゃあ普通いきなりモンスター現れないしな…。

トスーゴは竜馬に告げた。

「ここは危険な山ですから。」

ホント、危険極まりないな…。

「フ、フレアちゃんを助けないと。」

竜馬はフレアを助けに行こうとした。

だがそれをトスーゴは止めた。

「大丈夫です、今から私が何とかしますから。」

そう言うトスーゴは呪文らしきものを唱え始めた。

すると竜馬の眼前に人の形をした幻影が現れた。

幻影はモンスターの方へ向かって行き、モンスターは生身の人間
と思って幻影を襲った。

そうしている間にフレアは戻ってきた。

息が上がっている。

フレアは疲れを気にせずトスーゴに言った。

「トスーゴ、モンスターを陸に揚げて！」

「わかった、お姉ちゃん。」

すると幻影はモンスターを陸に追い出した。

そこをすかさずフレアが呪文を唱え、モンスターの体が一気に燃
え上がった。

モンスターの凄まじい雄叫びがしばらく広がったが、やがてその
雄叫びは消えていった…。

しばらく竜馬は啞然としていた。

トスーゴは竜馬に言った。

「私たちの能力で名前を決めたんです。私はゴースト（幽霊＝幻
影）。お姉ちゃんはフレア（火）。」

その時！

モンスターが最後の抵抗をし、トスーゴに飛び掛った！

「トスーゴ危ない！」

フレアは火の玉をモンスターに飛ばした。

命中！しかしモンスターは尚も向かってくる！
終わるか！？

しかし、ここが見せ場とばかりに竜馬が立ちはだかった。
モンスターが目の前に来た。

竜馬は瞬時に飛び上がりモンスターの急所にライダーキック
！ってな感じで蹴り飛ばした。

モンスターは吹っ飛び、湖に沈んでいった…。

「ふう〜。なんとか生き延びたね。」

竜馬は安堵のため息をついた。

「竜馬、強いじゃん！すごいキック1つで倒すなんて。」

フレアは竜馬の才に感動した。

そして、トスーゴも照れて頬を赤らめながらも竜馬に感謝した。

「ありがとうございます。竜馬さん。おかげで助かりました。」

「うん。まあ、あそこが唯一の見せ場だったしね。」

竜馬は笑って答えた。

「どうだった？あたしの活躍は。」

フレアが竜馬に尋ねた。

「う、うん良かったよ。本当に凄い呪文で…。」

「ねえ！こっち見てよ。」

フレアは竜馬が顔をそむけて言うので怒った。

竜馬は焦ってフレアに言った。

「フレアちゃん、まず服着てくれないかな？」

3人の旅はあと少し続く。

4話：レクレーション（後編）勝者

ゲームは開始された。

「サバイバル」。

この亜露霸高校の敷地全てを駆使して1時間頭につけたハチマキを取られずに残るのだ。

決して殺し合いではないぞ？

2・1人チームは竜馬の提案で科学室に潜伏する事にした。

しかし、呂猛も夏候惇もあまりよしとしなかった。

「普通男なら正面からぶつかるだろ！？それがなんだよこれ？隠れるだけかよ…。」

「私はこんな姑息な手を使ってまで生き残るなんて考えられないわ！」

2人とも血気盛んである。

そんな2人を竜馬は説得した。

「隠れるだけが戦いじゃないよ？時にはこうして体力を温存しとかなないと後半もたないよ？」

その言葉に2人は納得し、少しの間隠れることになった…。

が、10分もしないうちに呂猛はうるさくなった。

「おい竜馬！そろそろいいんじゃないか！？」

早い。この男に待機しろというのは無理なのか？

竜馬は呂猛の声の大きさを注意した。

「ちょ、ちよつと呂猛。そんなに大きい声出したら敵に見つかるって…。」

「そうよ！竜馬さんの言うことはもつとも…。そんなこともあなたに分からないの！？」

夏候惇も呂猛を責めた。声が大きいが…。

「お前ら全員こっから出てけよ…。」

他に隠れていたチームがボソツつと言った。

呂猛はそれを耳にした瞬間怒った。

「なんだと！いいだろ俺たち3人がいるくらい！！」
続けて夏候惇。

「いや、2人でいいわ。呂猛は邪魔よ！」

竜馬も呟いた。

「そうだよ…。別に僕はうるさくしてないし…。」

3人のわめきは科学室の外まで響く事になる…。

そして教室の周りには敵が続々と…（敵役は先生、半分の生徒である）

一方ザ・少数精鋭はグラウンドで連戦していた。

グラウンドでは他にも戦闘しているチームがたくさんいる。

カズも頑張っていた。

「えっほ、えっほ。ふう〜いつまで戦えばいいんだろうか…?」

カズは今1人倒した。（敵のハチマキを取ったことを指す）

「あぶない！」

馬趙雲はカズの後ろにいる敵を発見し、その自慢の足で一気に相手の懐に入り込みハチマキを奪った。

カズの後ろで残念そうな声がある。

「ちつくしゅ。やれると思ったのに。」

カズは今後の存在に気付いた。

そして馬趙雲に感謝した。

「おおっと、なんか誰かいたんか。助かったで、馬趙雲。」

「礼には及びませんよ！」

カズは向こうで戦いが静まっていくのが見えた。

「おっ、あそこでなんかおきとるで？」

カズは指を指して馬趙雲に言った。

馬趙雲はカズが指を指した方向を見た。

そこには黒と白の2色の着物を着、顔には痛々しい傷跡がある大男がいた。

「お前ら、どけ。俺が一気にけりつけてやるからよ。」
すると敵役の生徒たちはさっとどいた。

逃げる側の生徒達も凍りついたように動かない。

「俺ら教員を倒したら成績がグンとアップだよ。」
大男は言った。

「では九鬼先生、俺たちと手合わせ願います。」

数十人の生徒が九鬼の前に立ちはだかり1人の生徒が言った。

「いいだろう、遠慮するな、本気で掛かって来い。」

九鬼は笑って言った。

そして数十人の生徒達は取り囲み、四方八方から一斉に飛び掛った。

九鬼は突っ立っていた。無抵抗だ。

一気に全員が攻撃した。が、びくともしない。

「その程度か？もつと痛いかと思ったがな。」

生徒達の顔は恐怖で覆い尽くした。

と、九鬼はパワー全開だ！

顔を殴った生徒の腕を掴み、振り回し周りにいた8人を10メートル以上吹っ飛ばした。

残った数名は「ウァー」と雄叫びを上げ突っ込んでいった。

何本もの手、足を九鬼は難なくかわし、1人を張り手で突き飛ばし後ろにいた残り全員もぶつかり、一緒に吹っ飛ばされた。

全員ノックアウト、九鬼は気を失った生徒のハチマキを全て取った。

…。

「さて、次はどいつだ！？」

九鬼は逃げる側の生徒に尋ねた。
すると一目散に生徒は逃げ出した。

そこにチビツコがだるそうにいた。…あ、八重桜だ。

「ったく、めんどくせえなあ。」

八重桜はパツと手を上げると八重桜の方向へ逃げてきた生徒の周りに氷の壁が出来上がった。

逃げ場を失った者には敗北が待つのみである…。

逃げる側は大混乱になった。

カズも慌てていた。

「馬趙雲馬趙雲！逃げ場無くな？」

馬趙雲は冷静に辺りを見渡した。焦ったら負けらしい。

「あそこだ。あそこに行こうカズ。」

2人は部室に逃げ込んだ。

科学室に奴がやって来た。

竜馬らの側にいたチームの1人が怯えた声で言った。

「ふ、不良…不良だああ…!!」

金髪リーゼント、こんなサイズの制服あつたっけ？な巨大サイズの制服を着て腰パンの男に言った。（説明文長いな…）

「オイオイ、せっかく来たのになんだよこの歓迎はっ。」

不良は怒って言った。

夏候惇はそんな不良に尋ねた。

「あなたは逃げてきたんですか？」

「当ったり前だろ！なんたってB組の生徒だしな。心配性だな夏候惇は。」

呂猛は馬鹿にして言った。

その呂猛のハチマキを不良は取ろうとした。

「危ないっ！」

竜馬は呂猛を押し倒した。

「竜馬！お前そんな趣味かよ!？」

なんだこの発言…状況を把握してないようだ。

不良は舌打ちしていった。

「チツ、奇襲つてやつを試したんだが俺様には無理なようだな、1人残らず倒してやるとしよう。」

「お前は裏切り者か!？」

呂猛は不良に聞いた。

不良が答える前に竜馬が言った。

「呂猛、敵役もあるのわかってる？」

「…当たり前だろ!何を今更っ!」

呂猛は知らなかったようだ。

他のチームは一斉に科学室を飛び出し…なんと出口にも不良の連れがいた。

不良は黒い笑みを浮かべた。

「全員まとめて料理してやるよ!野郎共!!やつちまえ!」

一斉に襲い掛かってきた。

竜馬、呂猛、夏侯惇は奮戦したが、周りのチームがやられるにつれ数で上回る不良軍団に押されつつあった…。

「敵わないのか…?」

「ちつくしょう!こんな不良軍団に呂一族が負けてたまるかよ!」

「くっ、このままでは…。」

竜馬、呂猛、夏侯惇は口々に独り言を…。

ガラガラガラ!

閉め切ってあった科学室のドアを1人の老人が勢いよく開けた。

「そこで暴れている不良たちよ、ちよつと生徒指導部まで来てくれんかの?」

十四創滅だ。

「なんだよ教頭が。」

不良は十四創滅に言った。

「お主たちは夜遊びの疑いがかつとてな。ご同行してもらえんかな？」

不良はビクツとした。つまり凶星だ。

さすがに天下の不良軍団でも教頭様には逆らえないのかしぶしぶ科学室を後にした。

十四創滅は不良軍団の攻撃に唯一耐え抜いた3人を褒めた。

「お主たちは凄いのう。あれほどたくさんのあやつらから身を守れたんじゃ、名を覚えてくれんかの？」

「呂竜馬です。」

「…呂猛。」

「夏侯惇です。」

また1人だけ…。

「あと少しでふあいなるらうんどじゃ。頑張るんじゃぞ。」

3人の名を聞いた十四創滅はにこやかに微笑んで科学室を後にし、不良たちを連行した。

「ファイナルラウンド…だよね？」

竜馬は言った。

カズと馬趙雲が逃げ込んだ部室には馬があつた。

「ああ、騎馬がある。」

馬趙雲の騎馬という言葉にカズは突っ込んだ。

「騎馬あ？普通に馬やる？それにしても何部？ここ。」

「多分戦部でしょう。」

「いくさ部？」

校内放送が流れた。

「ワシじゃ、無窮である。残り5分なのでファイナルラウンドじゃ！5分以内にワシの校長室に辿りついたものは成績アップじゃ。

最後の戦いじゃ、生き残っておる者。頑張るのじゃぞ？」

放送を聞いた馬趙雲は馬1頭を馬小屋から出した。

「ここの馬を拝借しましょう。」

「えっ？俺馬に乗ったことないで？」

カズは驚いて言った。

「これしか方法はありません。」

「だよなあゝハハハ。」（苦笑い）

残り2分。

校舎内を1頭の馬が駆ける――

校長室前には敵役の生徒が大勢いた。

馬趙雲はカズに言った。

「拙者が突撃を仕掛けます。カズは敵が拙者に気を取られている隙に風の如くに校長室に向かってください。では！」

そいつって馬趙雲は馬を降りた。

囃作戦の始まりだ！

「1年B組馬趙雲、ここに見参！我こそはと思うものは掛かって来い！」

なんとも威勢のいいものである。

カズは頃合を見計らって校長室に行った。慣れない馬に乗りながら。

実は2・1人チームも敵に取り囲まれながらも戦っていた。

「早くここを突破しないと時間が……。」

夏候惇の言葉が呂猛の耳に入った。

「夏候惇！竜馬！ここは俺が道をこじ開ける、そこを突破してくれ！頼んだぞ！」

呂猛はそう言って校長室の道を開けようとしたその時！

「おおゝつと呂猛、あぶないでえ！？」

カズの馬が呂猛を蹴飛ばした。

「うがアツ！？?!」

呂猛の体は宙を舞い、敵の生徒を巻き添えにした。

カズも上手く馬が扱えず、

「あ、ワ〜リィ。」

とか言ったりして散々戦場を荒らしまわった末に

「アディオ〜ス！竜馬。」

どこか別の部屋に突っ込んで姿が消えた。

この隙を2人は見逃さなかった。

「竜馬さん、行きましょう！」

「はい、了解です。…呂猛、君の犠牲を僕達は無駄にはしないよ。」

竜馬は校長室の扉を開けた―。

パンパン！

当たり前田のクラッカー♪

補助員がクラッカーをならし、その奥には校長、無窮がいた。

「よく、ここまでたどり着いたなあ。1年生のお2人さん。ワシは2年ぶりの1年のゴール者に感動したよ。さあさあ、ここに自分の名前を書いてくれんかの。記録を残すのじゃ。」

2人は殿堂入りした。（ポケモンのように…）

その後も残り時間僅かながらもゴール者は2、3年生ばかりだがたくさんいた。

呂猛の兄である王、虎の姿もあった。

残り時間5、4、3…

カズが入ってきた。制服が黒焦げだ。一体何があったのだろうか？

1…

1人飛び込んできた。

馬趙雲だ。全身傷だらけだが、その姿は輝いていた。

「馬趙雲！よく入ってこれたなあ〜もうダメかと思っていたよ。」

（ギリギリ入ってきたやつがよく言う…）

「カズもそんな姿になりつつも入って来れたんだね、おめでとう。」

2人は握手した。これぞ、友情の証だろう。（その後竜馬がなぜ握手したのか聞いたが「雰囲気で」なだけだったことが判明したのは後の事である）

こうして新入生歓迎レクレーションは幕を閉じた。

というより、このサバイバルゲームが主すぎる気がしてならないのだが…。

とりあえず、終わりったら、終わりっ！

呂猛は校長室に入れなかったみたいである。（殿堂入りも出来なかったとか）

5話：早くお見舞いに行かせてください

亜露霸高校から約2キロ離れている病院―。

ここでは先日行われたレクレーションの「サバイバルゲーム」において重傷等の人が多数入院していた。

その中には呂猛も含まれていた。

仲間が入院とだけあって竜馬は見舞いに行こうと誘った。

亜露霸高校1年A組教室―。

「カズ、今日の放課後呂猛の見舞い行かない？」

竜馬はカズを最初に誘ってみた。

「え？ん、みんなと帰る予定あるんやけど…」

カズは同じ中学出身の人と帰るのが日常的である。

「別にいいで。ついでに馬趙雲誘っていいけ？」

カズはサバイバルゲームの一件を機に馬趙雲とはとても仲が良くなったのである。

水魚の交わりつてな感じで、

ということでカズを誘うのに成功した。

次に竜馬は夏候惇の元へ行った。

どうやら夏候惇も誘うようである。

「夏候惇さん、今日の放課後呂猛のお見舞い行くけど、一緒に来る？」

「私が呂猛の見舞いを…。面白いな、いいでしょう、同行するわ。」

つてことで夏候惇の説得も難なく成功したのであった。

今日の日程も終わり、最後に先生からの諸連絡だけだった。

「このクラスもたくさんの入院者が居ます。暇があったらお見舞

いに行こう。以上！」

一之瀬の言葉で最後は締めくくられた。
全て終わって放課後だ！今から見舞いヘレッツゴーである。

学校終わって4時半―。

「んじゃ、見舞いに行こうか。」

竜馬が皆をまとめる…が

「馬趙雲呼んでくるわー。」

「私一之瀬先生に呼ばれていたんだっただわ。先に行つて。
カズと夏候惇は教室をささと去るのであった。」

数分後カズらと合流し、夏候惇を抜いて一行は出発した。

1階の廊下―。

なぜか不良軍団が廊下掃除をしている。

竜馬は近くにいた四条に尋ねた。

「四条先生、なんで彼らは掃除しているんですか？」

「なんかね、罰らしいわ。どうやら教頭先生の逆鱗に触れちゃったみたいで…。で、私がお目付け役ね。」

竜馬は先日の子バイバルゲームの時、十四創滅に呼び出しを喰らっていた事を思い出て納得した。

そんな中カズは余計な一言を発する。

「罰かあゝ、だせえなあゝ。ちゃんと校則守ってけばええのに…。」

┌

その言葉を奴は聞いていた。

「ほう、よくまあ俺の前でそんなことが言えるな？」

恐る恐る振り返ってみたが思った通りの人物であった。
やっぱり不良だ。

「ふざけやがって！ぶつ殺してやる！！」

「ぼ、暴力はんたゝい！」

戦闘開始である。

カズは逃げ回り、不良がそれを追った。それを馬趙雲が介入し、不良の連れも戦闘に参加。「それは卑怯だぞ？」と竜馬も入り、遅れて合流しにきた夏侯惇も止めようと中に入り1階は激しさを増した。

「あ、あなた達？また怒られるわよ？」

四条は男たちの戦いを収拾しきれない！

「そうやで？こんなことしたらまた怒られるんやで？」

カズのまた無駄な言葉に不良は怒りを増した。

「お前を1発殴らせてくれるなら直ぐ終わりにしてやるよ！」

「お前ら。四条が言ってる事が聞けねえのか？」

誰かの声がした。

ハツと戦闘がやんだ瞬間不良がカズを殴った。

「痛アツ！」

「おい、不良！空気を読めよ。」

また声がした。

不良はにらんでやろうと声のほうを見た。そこで自分のした過ちを悟る事となる…。

声の主は八重桜だ。

「桜ちゃんいいタイミング♪」

四条は八重桜の登場を喜んだ。

「ちゃん付けすんじゃねえよ…。」

いつものように八重桜は四条を呆れて怒った。

これによって不良は八重桜によってまた生徒指導部へ連行される事となる…。(笑)

「あなたたちも随分とやられたわねえ…。保健室にいらっしやい。」

四条は竜馬達を保健室に連れ込んだ。

時刻は5時である―。(結構やりあったみたいだな)

保健室は四条の私室と化しつつあるらしい。今はなき（入院中）呂猛の話だ。

全体的に水色えお基調としている。保健室なのに白じゃないのか…。

そこで怪我の手当てをしてもらった。

そのうち八重桜がやってきて竜馬達に言った。

「お前ら大丈夫か？あいつらもそんなに弱くねえ…。よくやられなかったな。」

そして夏候惇の方を見て。

「お！お前は女か！」

「先生失礼ですが…。」

さすがに先生相手でも嫌な所を突かれたので黙っていられないようだ。

「桜ちゃん、謝った方がいいわよ？」

四条は笑って言った。

「…（ブツブツ）悪かったな。」

まだまだ子供だ。

結局保健室で時間を費やしすぎた。

時刻は6時半…。

ちよつと遅いがようやく病院へ向かった。

病院についたら7時だ。

病院に着いたら着いたで馬趙雲とカズはトイレ。しかもカズはなぜか迷子…。

病室に着いたら7時近くになっていた…。

やっと呂猛に会った。

「おいおい。もっと学校は早く終わってるだろ！？」

呂猛の第一声がこれだ！

「…帰る。」

夏侯惇はもう帰った。

呂猛は驚いて残りのメンバーに尋ねた。

「俺、なんか言っただけ？」

「多分今の台詞だと拙者は思う。」

馬趙雲は答えた。

「多分そうやと思うで？」

カズも分かっている。

しかし残りの2人はなぜ分からなかったのであった…。（竜馬と呂猛のこと）

「呂猛、一応授業何してるかわかるようにノート持ってきたけど見る？」

「おう！見るぜ見るぜい。」

竜馬はノートを呂猛に手渡した。

いい人だなあゝ竜馬。

その後雑談をしていると2人の男が入ってきた。

呂虎と呂王だ。

「あ、呂虎先輩に呂王先輩！こんばんわ。」

竜馬は真っ先に挨拶をした。

続いて馬趙雲、カズだ。

その後も少し話をして竜馬らは病院を後にした。

竜馬は来るのにてこずったのに後悔したのであった…。（ほとんどカズの責任だが）

場面は変わって夏侯惇。

一足先に帰っていたが、家には着いていない！

夏侯惇には魔の手が伸びていた。

誘拐だ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7704e/>

こちら亜露覇（アロハ）高校！

2010年10月11日00時55分発行